

九州農業の60年



令和5年
農林水産省九州農政局

60年前の九州の農業・農村①

昭和36年竹田市



北九州4県では稲作が経営の中心
(総産出額のうち米が51%)

昭和42年宮崎県高千穂町



めぐり棒を利用して大豆の脱穀

写真提供: 延岡城・内藤記念博物館

昭和44年宮崎県佐土原町



みかんの生産が急速に拡大
(全国の35%のシェア)

資料: 農林省『農業所得統計』(昭和38年)
『耕地及び作付面積統計』(昭和38年)

昭和38年_佐賀県巖木町



60年前、中山間地では、大雪に見舞われることがありました。

60年前の九州の農業・農村②

昭和30年大分県朝地町



和仔牛品評会：役肉用牛から肉用牛へ転換。昭和38年九州の役肉用牛飼養頭数は70万頭でした。資料：農林省「畜産統計」(昭和38年)

昭和35年福岡県（京築地方）



めん羊品評会：昭和38年は、めん羊の飼育が九州では3万頭でした。

資料：農林省「畜産統計」(昭和38年)

昭和38年福岡県（福岡地方）



農民車コマツユニカ

昭和30～35年頃_佐賀県厳木町



自動車の普及が始まった(農家100戸当たりの農用トラック・オート三輪:2.3台、乗用車:0.9台)

九州農政局の誕生

- ・高度経済成長の中で、農業と他産業との格差が増大
- ・貿易自由化が進展（飼料、大豆、綿花、生鮮野菜など）



- ・食料増産から、需要の多い品目への「**選択的拡大**」へ
- ・生産性向上のための「**構造政策**」の推進



地域の実情に即した
農政の展開のため
全国7カ所に「地方農政局」
を設立（昭和38年5月1日）



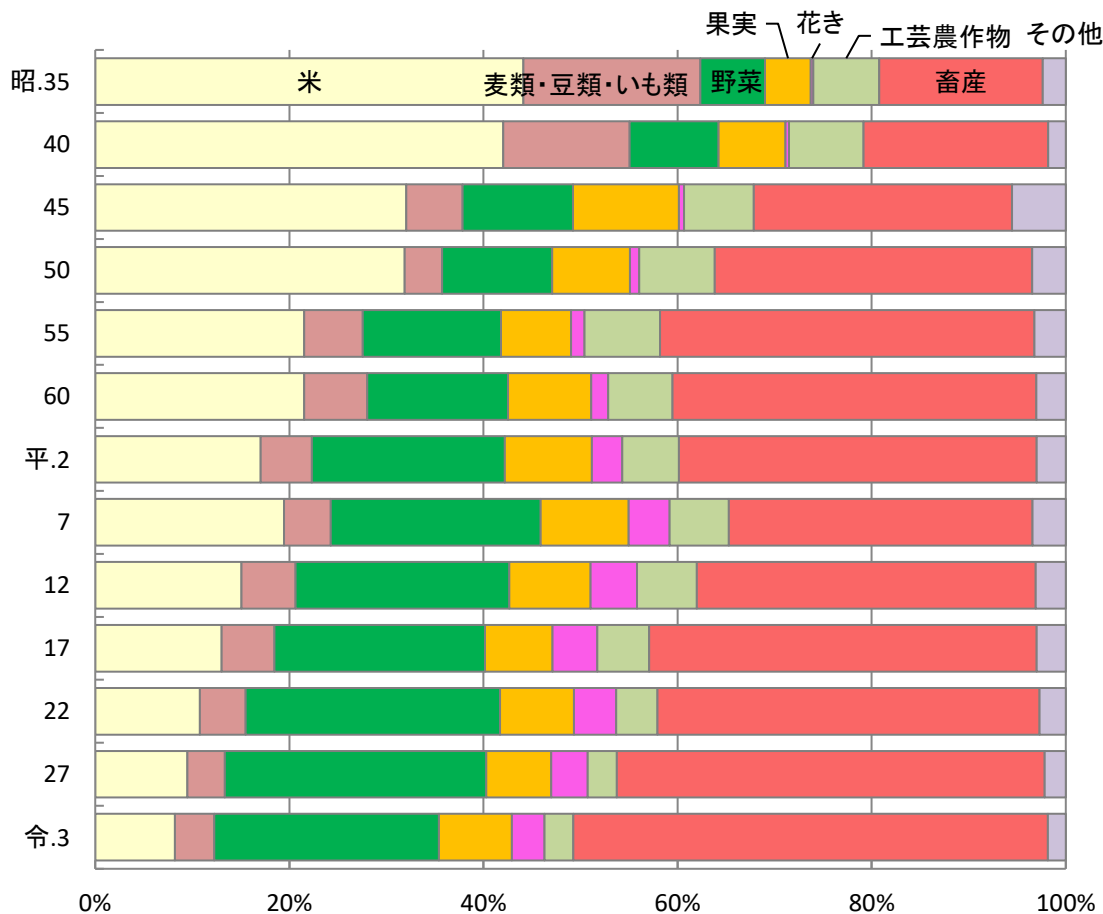
九州農政局旧庁舎

60年の歩み～農業生産構成の変化～

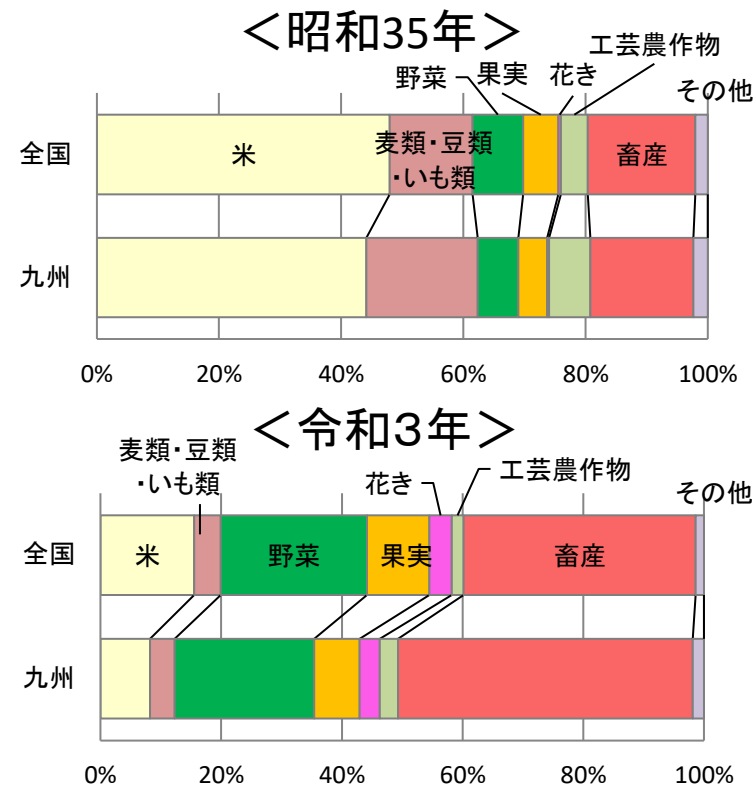
○昭和30年代の九州農業は、米が主体。いも類や工芸農作物(なたね、たばこ、茶、い草等)の比率が全国より高かった。

○昭和40年代から50年代にかけて、畜産が大きく拡大し、近年はさらに拡大。一方で米のウェイトは縮小。昭和60年以降は、野菜のウェイトが拡大。

○農業産出額構成比の推移(九州)



○全国と九州の比較



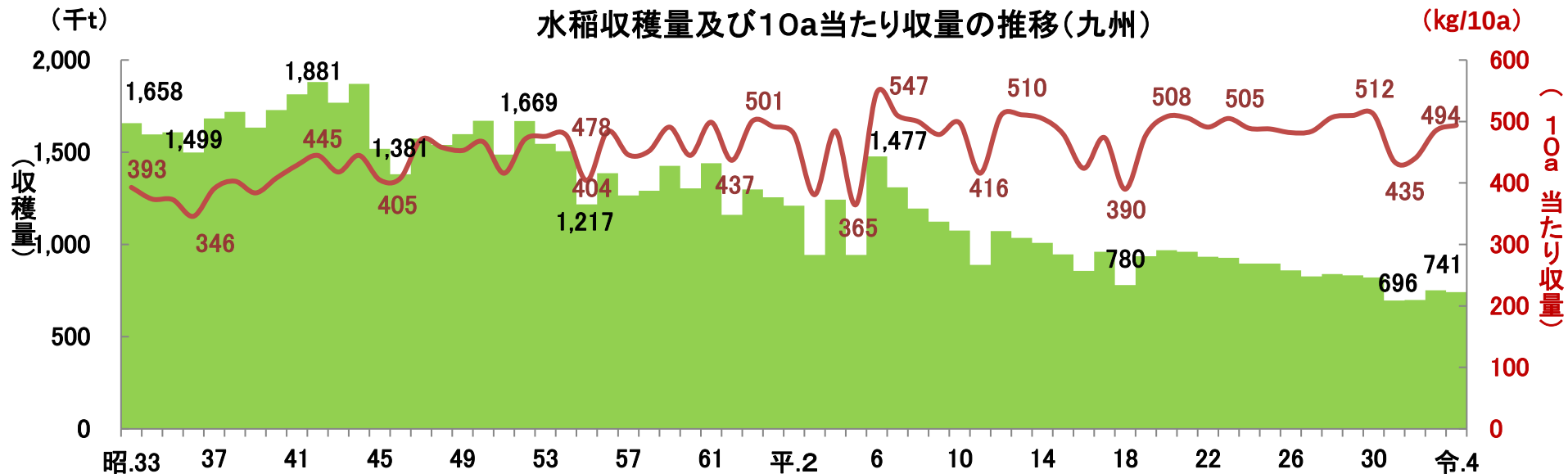
資料:農林水産省『生産農業所得統計』

稲作の変遷

○米の収穫量は、需要が年々減少したことにより、一貫して減少。なお、10a当たり収量は、生産技術の進展や新品種の開発等により増加。

○平成16年以降、登熟期の高温による白未熟粒、充実不足が問題化。高温に強い品種の育成、導入が進展。

米消費量ピーク S38	佐賀県単収日本一 512 kg/10a S40	田植機、バインダー、 カントリーエレベーターの普及始まる S40年代	自主流通米制度導入 S44	米の生産調整開始 S45	稲作転換対策開始 S46	ヒヨクモチ育成 S46	汎用コンバインの普及始まる S60	ヒノヒカリ育成 H元	農業合意(米のミニマム・アクセス) H5	大不作(全国作況74) H5	食糧管理法廃止 H7	高温に強い品種の育成(にこまる、くまさんの力、元気づくし、さがびより、おてんとそだち) H17~H23	戸別所得補償制度 ※平成25年経営所得安定対策に名称変更 H22~H25	行政による生産数量目標の配分廃止 H30
----------------	-------------------------------	--	------------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------------	---------------	-------------------------	-------------------	---------------	--	--	-------------------------



写真でみる農業技術の変遷

- 稲作は、昭和30年代に動力耕うん機が普及。さらに昭和40年代には、歩行型田植機・バインダーが普及し、田植え・収穫作業の機械化が進展。
- ロボット技術やICTを活用したスマート農業技術の導入。

耕うん作業

～昭和30年代



牛 耕

昭和30年～40年代



動力耕うん機

昭和40年代～



乗用型トラクター

現在



ロボットトラクター

写真提供: 延岡城・内藤記念博物館

田植え作業

～昭和30年代



手植え

昭和40年～50年代



歩行型田植機

昭和60年代～



乗用型田植機

現在



ロボット田植え機

写真提供: 延岡城・内藤記念博物館

収穫作業

～昭和30年代



手刈り

昭和40年～平成初期



バインダー

昭和50年代～



コンバイン

現在



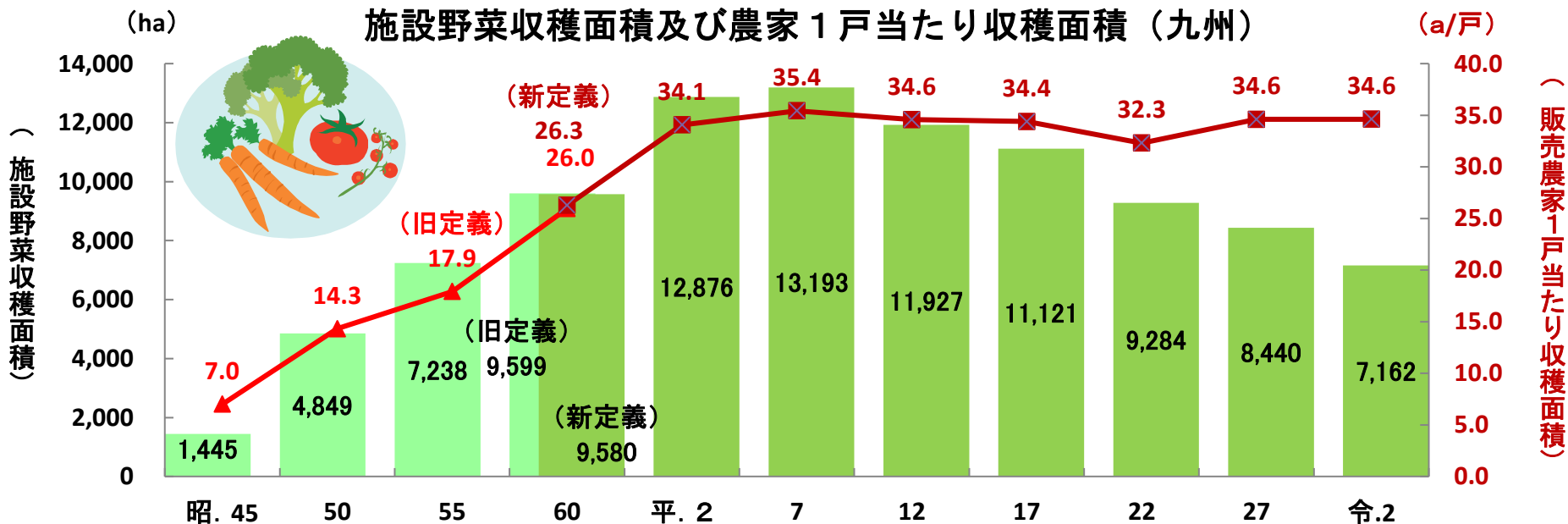
ロボットコンバイン

写真提供: 延岡城・内藤記念博物館

～野菜生産の変遷～

- 昭和40年代には、大型連棟ハウスの導入、温風暖房機の普及、昭和50年代には、雨よけハウスの普及によりトマトやピーマン等の栽培が省力化。
- 平成27年から、大分県、宮崎県等全国10箇所に次世代施設園芸拠点を整備。

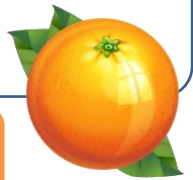
始まる プリンスメロンの試作 S37	大型連棟ハウスの導入、 温風暖房機の普及 S40年代	石油パニック深刻化 S48	雨よけハウスでトマト の栽培 S53	ピーマンに雨よけ ハウスが普及 S56	イチゴ「どよのか」普及 S60	ハウス桃太郎本格的に 導入、スイカの自動選 果機導入 S60年代	葉菜類にセル成型苗 の導入始まる H5	水田転作面積の拡大 により露地野菜の 栽培拡大 H9	福岡県においてイチゴ 「あまおう」の輸出開始 H15	植物工場の普及 H20年代	大分、宮崎等、全国10 箇所に「次世代施設園芸 拠点」を整備 H27-29
--------------------------	----------------------------------	------------------	--------------------------	---------------------------	--------------------	---	---------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	------------------	--



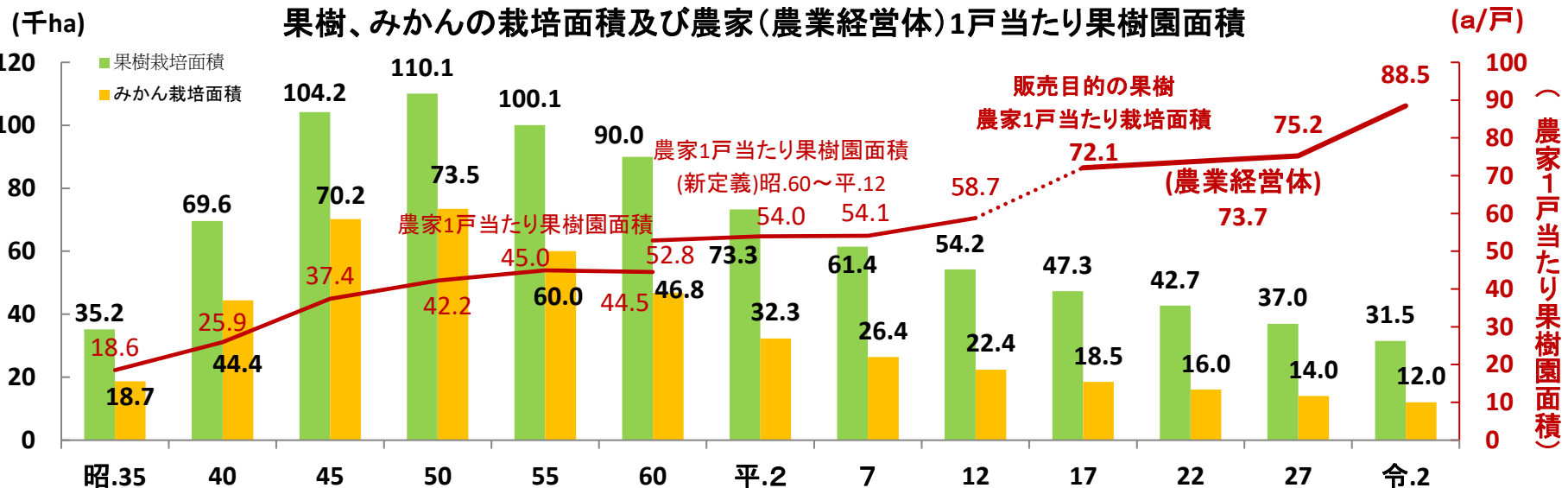
資料：農林水産省「農業センサス」

～果樹生産の変遷～

- 昭和40年代後半に、温州みかんは生産のピークを迎えたが、その後、生産過剰で減少。落葉果樹についても昭和50年頃をピークに減少傾向。
- 近年、優良品種・品目への転換等により、高品質な国産果実を生産。

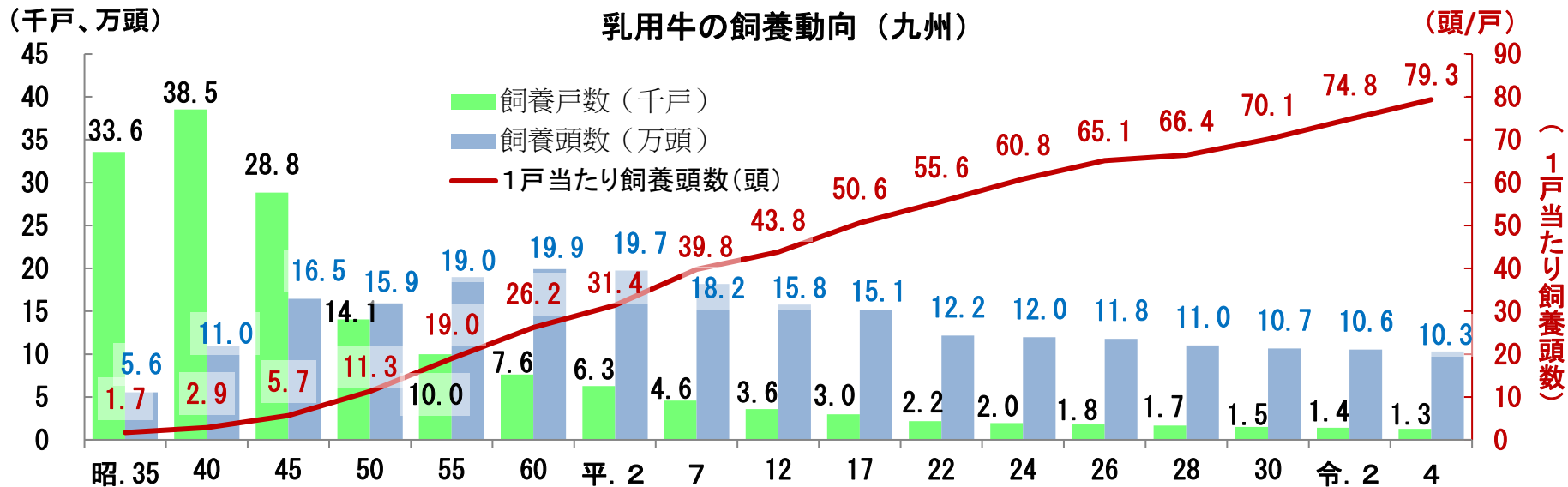
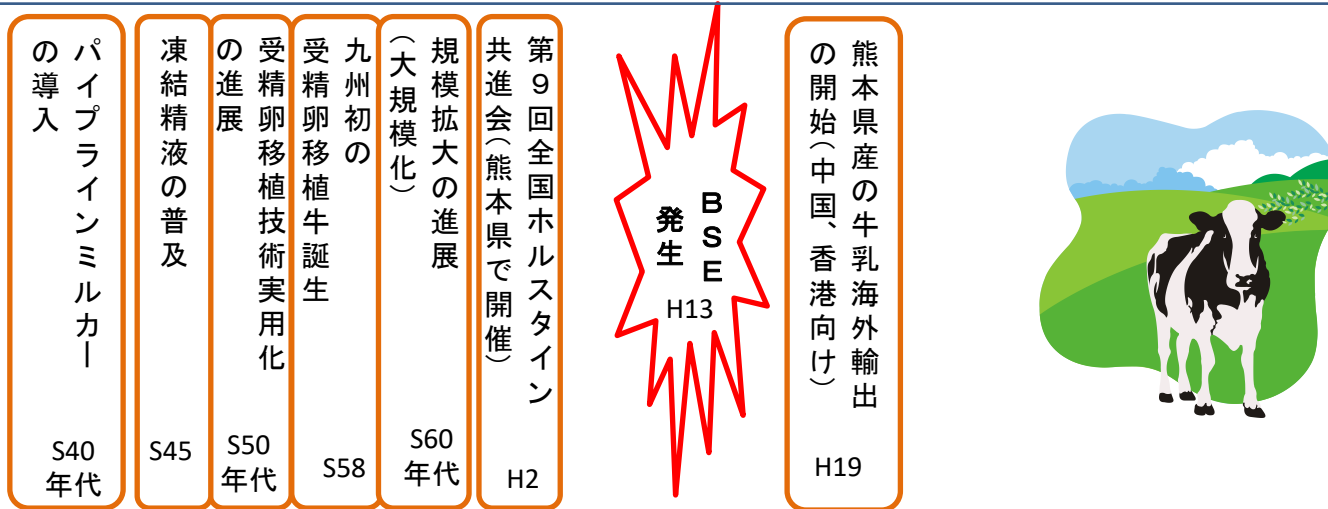


みかん列車東京へ出発 S37	みかんの輸出開始 S42	ハウスみかん栽培開始 S45	みかん果汁工場操業 S40年代後半	みかんの生産がピーク S40年代後半	豊作により価格暴落 S40年代後半	等への転換始まる S50～	温州みかんから中晩柑 S50～	早生種の導入始まる S50年代前半	オイルショックから極 S50年代前半	宮崎県でマンゴーの栽 S59	培始まる S59	オレンジ輸入自由化 H3	登録 H5	熊本県、デコポンの商標 H5	破壊選果機（光センサー） H8	温州みかんの選果に非 H8	導入始まる H11	柿の優良品種「太秋」の H11	各県でアジアを中心に H10年代	果実の輸出開始 H10年代	渋皮が簡単にむける栗 H20	「ほろたん」の導入始まる H20	「シャインマスカット」 H20年代～	の栽培が急拡大 H20年代～
-------------------	-----------------	-------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	------------------	--------------------	----------------------	-----------------------	-------------------	-------------	-----------------	----------	-------------------	--------------------	------------------	--------------	--------------------	---------------------	------------------	-------------------	---------------------	-----------------------	-------------------



～酪農の変遷～

- 酪農(乳用牛)については、昭和40年代の畜産物需要の急増を背景に、省力技術であるパイプラインミルクラーの導入に伴い、規模拡大が進み1戸当たり飼養頭数が著しく増加。令和4年では、昭和35年に比べ約 46倍まで増加。



酪農における搾乳作業の変遷

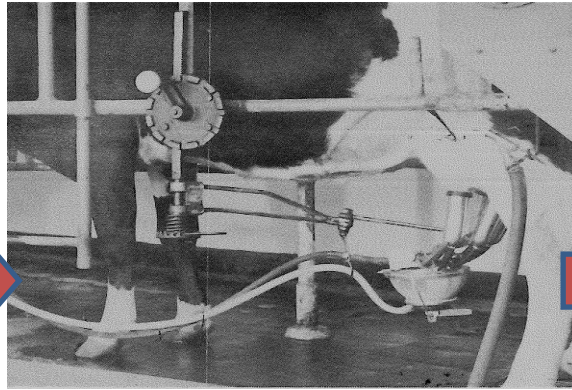
- 手搾りだった搾乳は、昭和30年代バケットミルカー、昭和40年代パイプラインミルカーが導入された。
- 平成初期には、多頭化が進みフリーストール・ミルクングパーラーが導入されさらに省力化された。平成中期以降、搾乳ロボット導入。

～昭和30年代



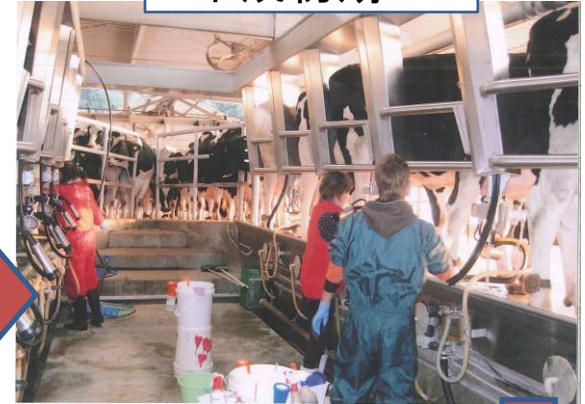
手 搾 り

昭和40年～50年代



パイプラインミルカー

平成初期～



ミルクングパーラー

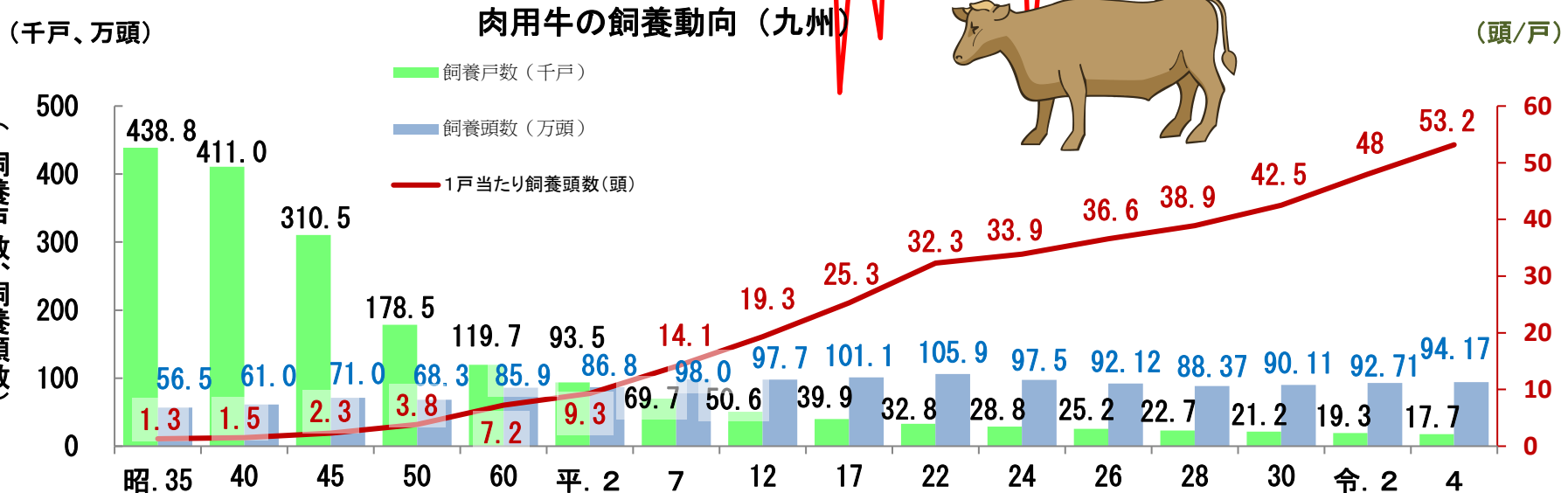
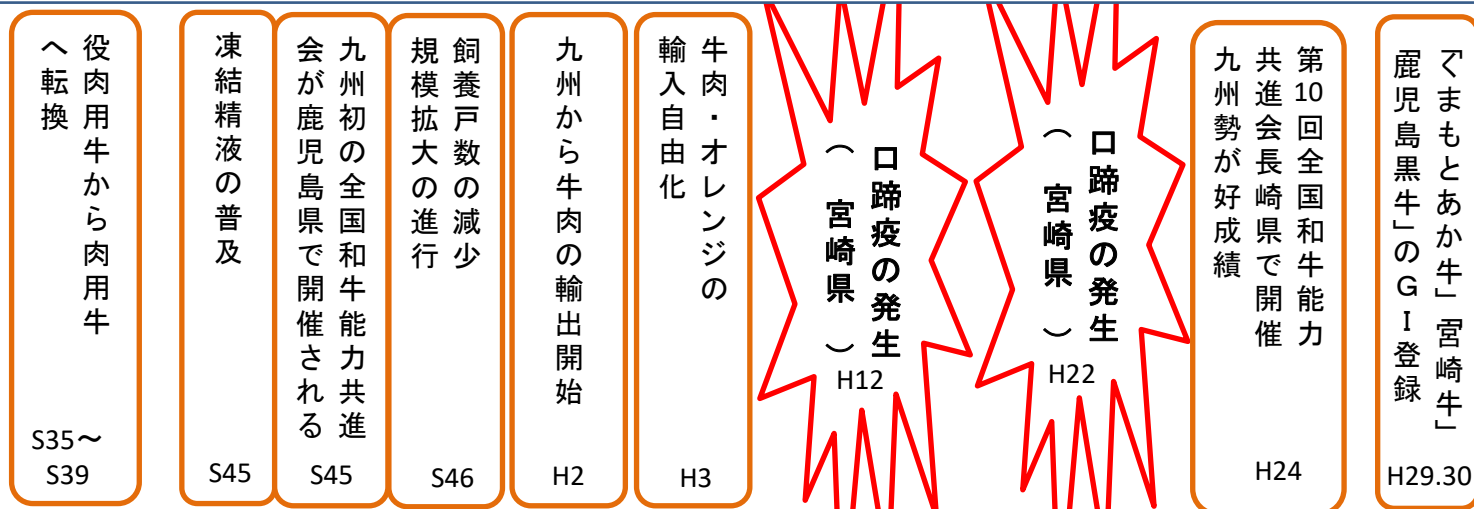
平成中期～

搾乳ロボット



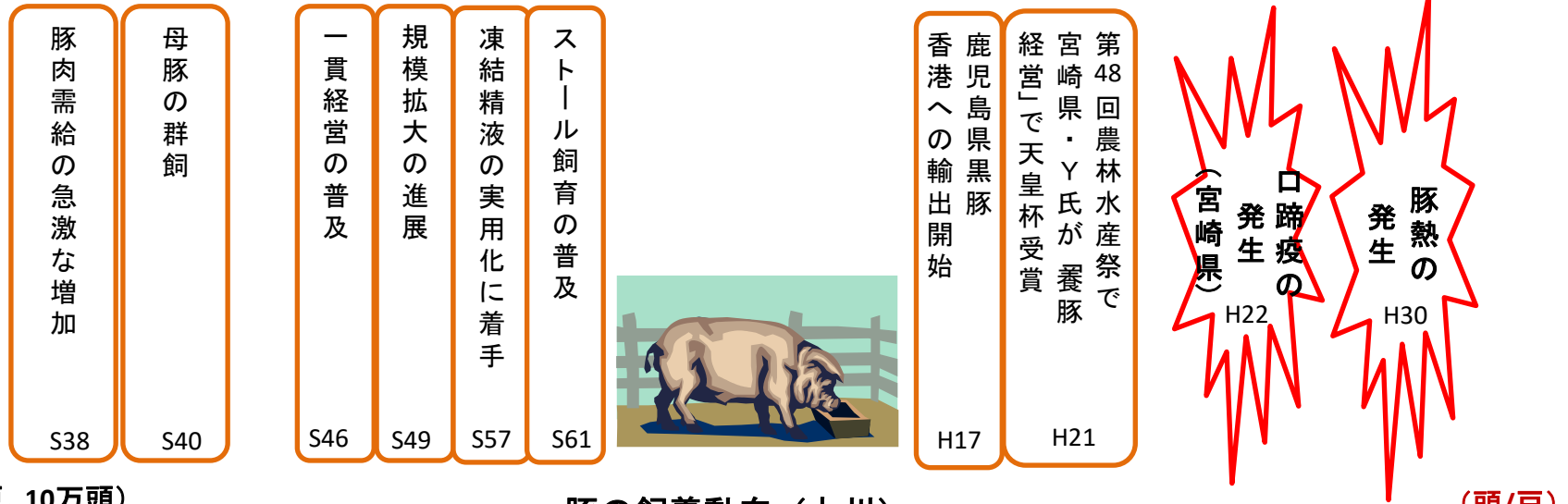
～肉用牛生産の変遷～

- 肉用牛では、昭和40年代の畜産物需要の急増を背景に若齢肥育技術、乳用種の肥育利用技術の普及等により、規模拡大が進展。
- 平成初期には、九州から牛肉の米国向け輸出を開始。



～養豚の変遷～

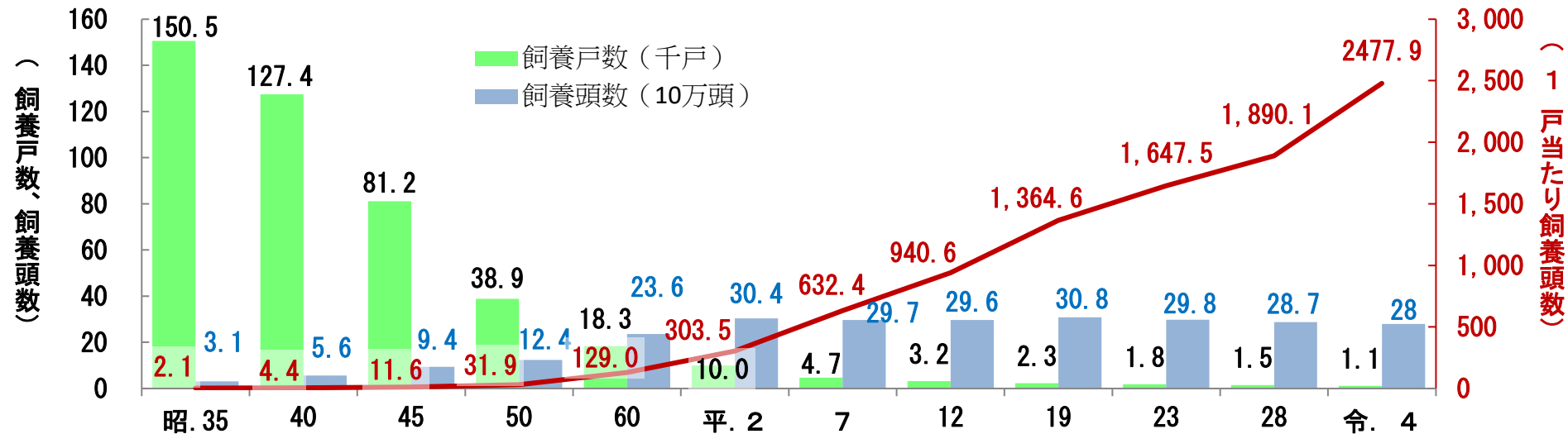
- 養豚経営は、昭和40年代の母豚の群飼や一貫経営、昭和60年代のストール飼育の普及により急速に規模拡大が進展。
- 平成17年には、「かごしま黒豚」を香港へ輸出開始。



(千戸、10万頭)

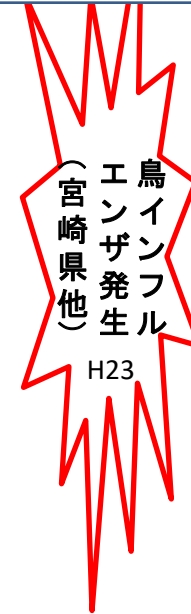
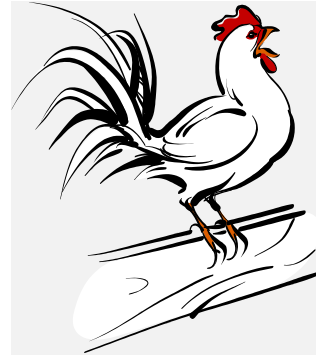
豚の飼養動向 (九州)

(頭/戸)

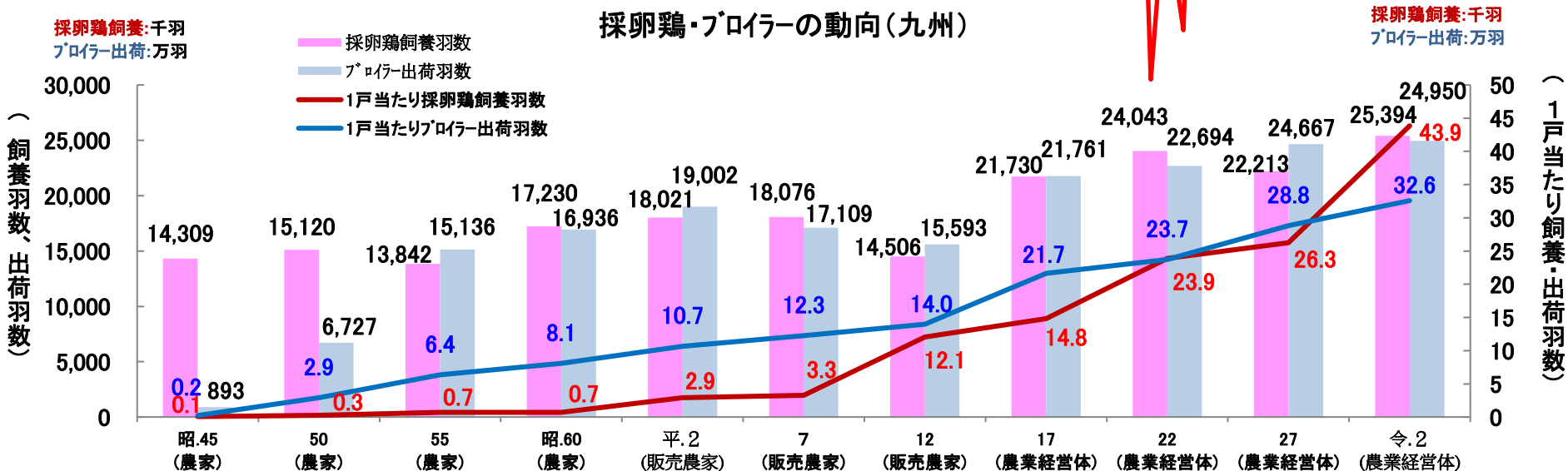


～養鶏の変遷～

- 昭和25年頃、平飼いから多段飼育育成であるバタリー鶏舎へ、昭和30年代にはさらに衛生的で省力的なケージ鶏舎への転換。
- 昭和60年代にはウィンドレス鶏舎が普及し、給餌や採卵が自動化され、1戸当たり飼養羽数が急激に増加。



採卵鶏・ブロイラーの動向(九州)



資料：農林水産省「農業センサス」

～飼料生産の変遷～

- 昭和30～40年代にかけて、ブロックサイロ、気密サイロの普及により、通年サイレージが普及。平成に入りラップサイレージやロールベアラが普及し収穫作業等が省力化。
- 近年の飼料作物の作付面積は、WCS(ホールクロップサイレージ)用稲(稲発酵粗飼料用稲)の増加に伴い、増加傾向で推移。

ブロックサイロの普及

S38～

気密サイロの導入始まる

S40年代

コーンハーベスタの普及始まる

S50年代

トウモロコシホールクロップサイレージの普及

S58

ラップサイレージ・ロールベアラの普及進む

H元～

稲発酵粗飼料(ホールクロップサイレージ)専用収穫機の開発・実用化

H12

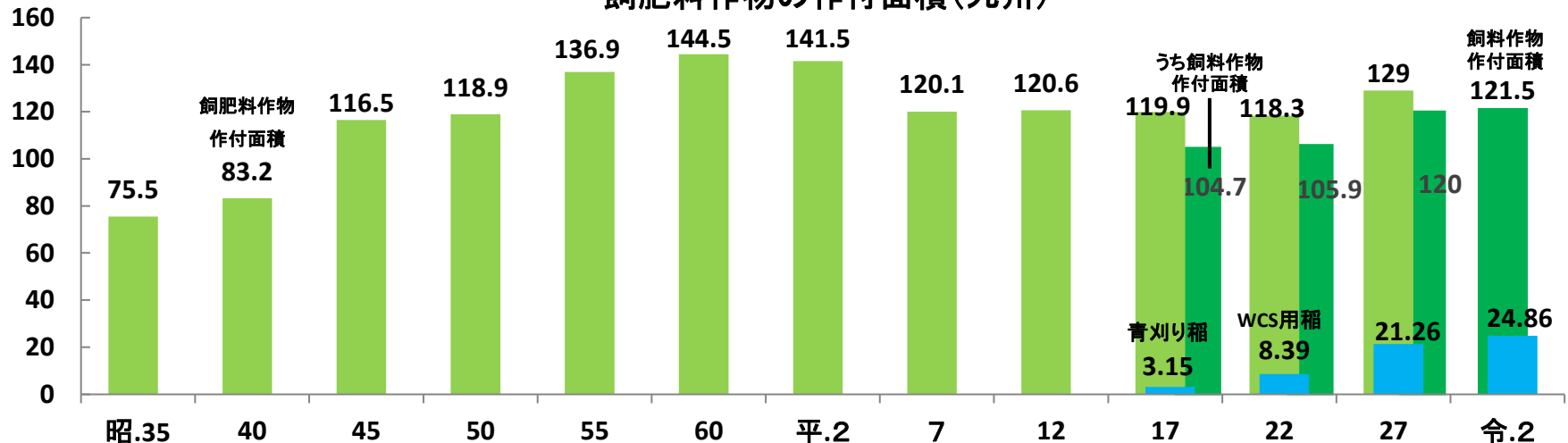
九州で稲発酵粗飼料の作付け面積の増加

H20～



(面積: 千ha)

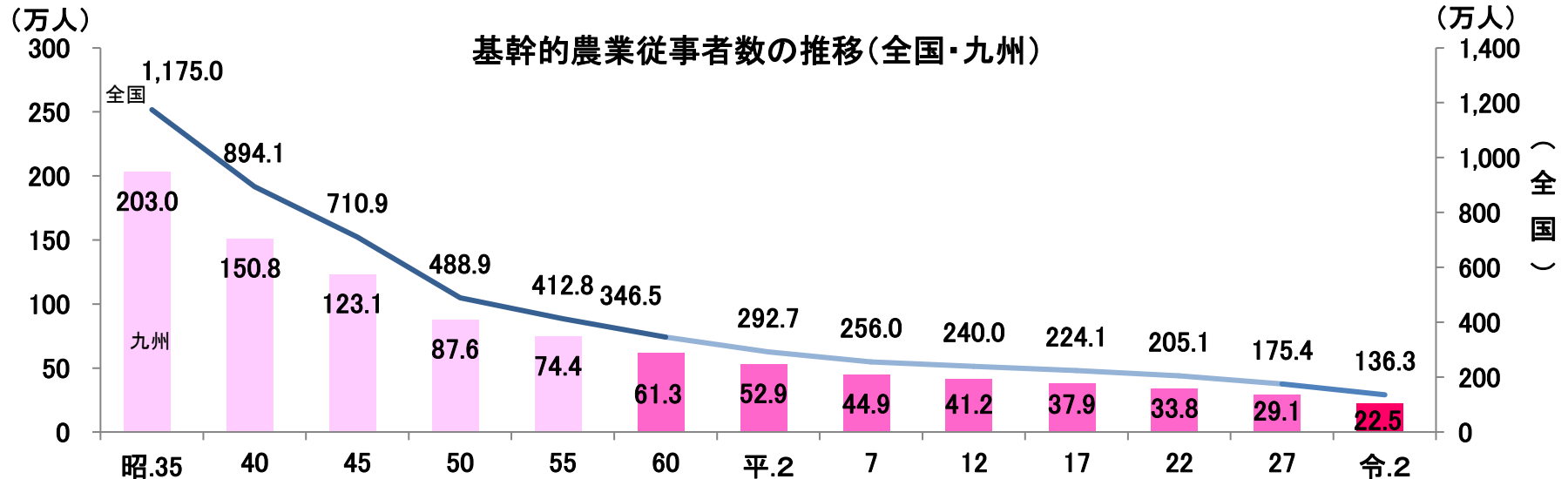
飼肥料作物の作付面積(九州)



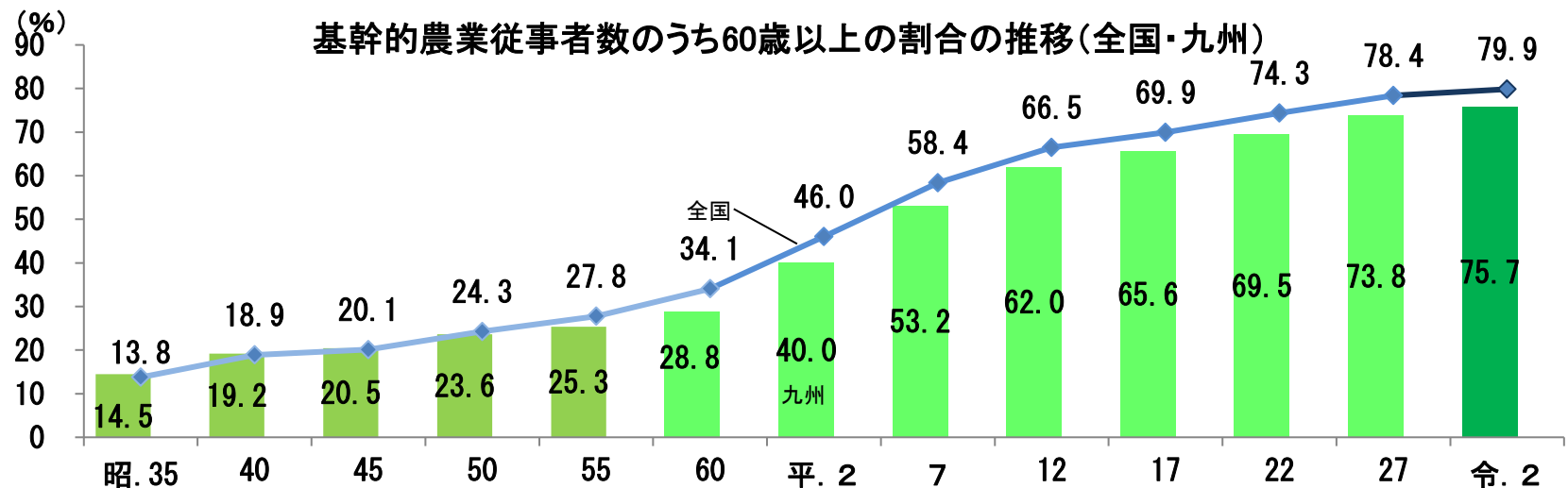
～基幹的農業従事者数の推移～

- 基幹的農業従事者は年々減少し、昭和35年比で約9割減。
- うち60歳以上の割合が大幅に増加。

基幹的農業従事者数の推移(全国・九州)



基幹的農業従事者数のうち60歳以上の割合の推移(全国・九州)

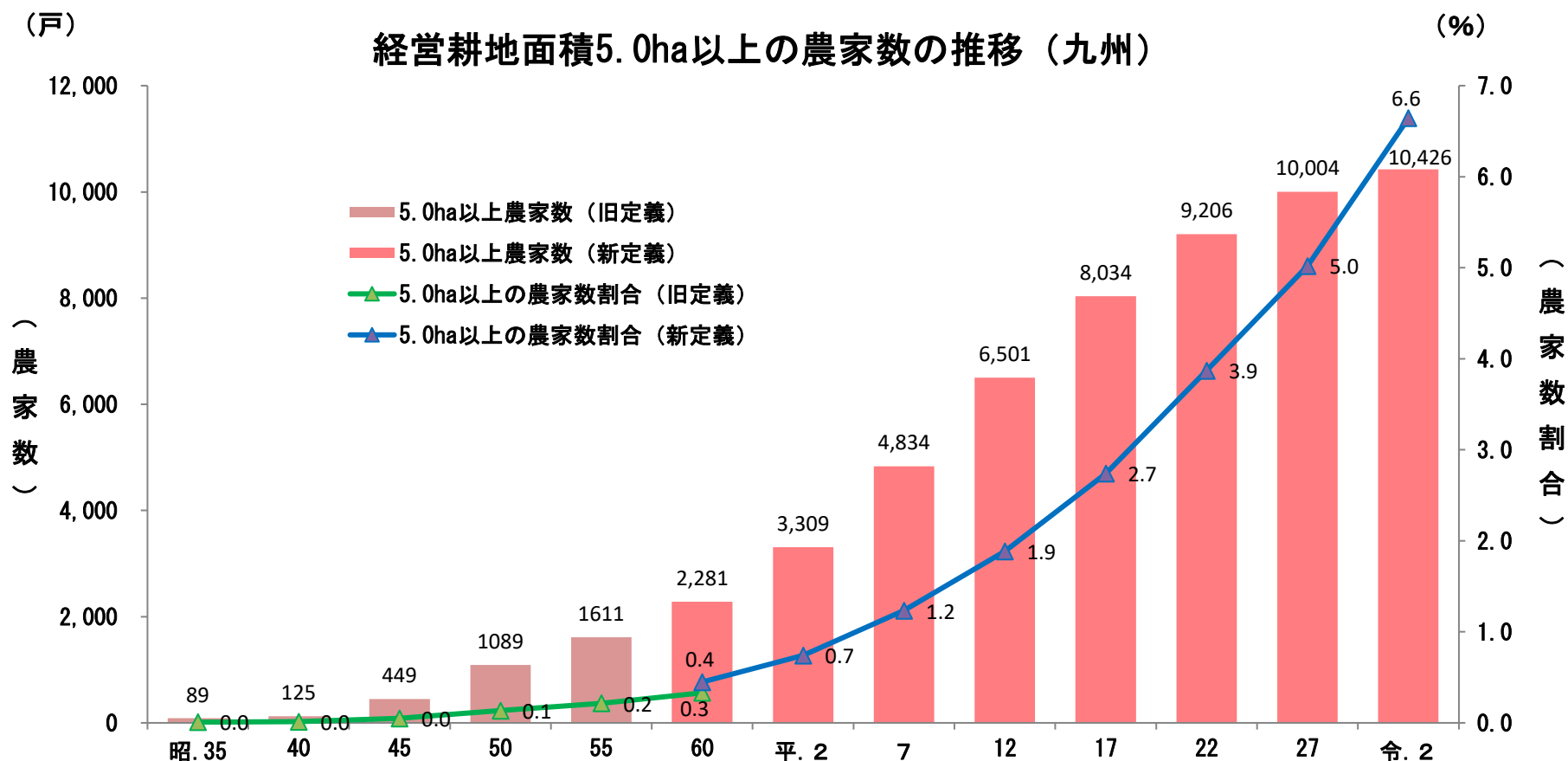


資料：農林水産省「農業センサス」 ※基幹的農業従事者：ふだん仕事として主に自営農業に従事しているもの

注：昭和35年から55年は農家、昭和60年から平成27年は販売農家、令和2年は農業経営体のうち個人経営体のデータ

～担い手の推移(経営規模の大きい農家)～

○九州における経営耕地面積5.0ha以上の農家数は、令和2年では、昭和35年に比べ約117倍増加し、販売農家全体に占める割合も増加。



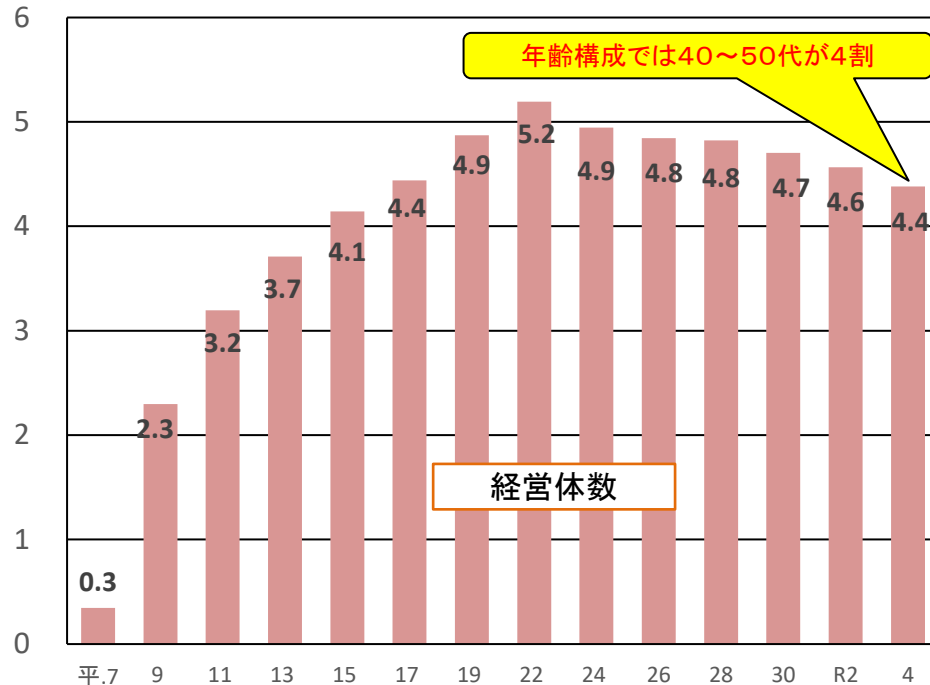
資料：農林水産省「農業センサス」

～担い手の推移(認定農業者等)～

○平成5年の制度創設以来、認定農業者は大きく増加。22年以降は減少傾向で推移。令和4年の年齢構成では 40～50歳代が全体の4割。

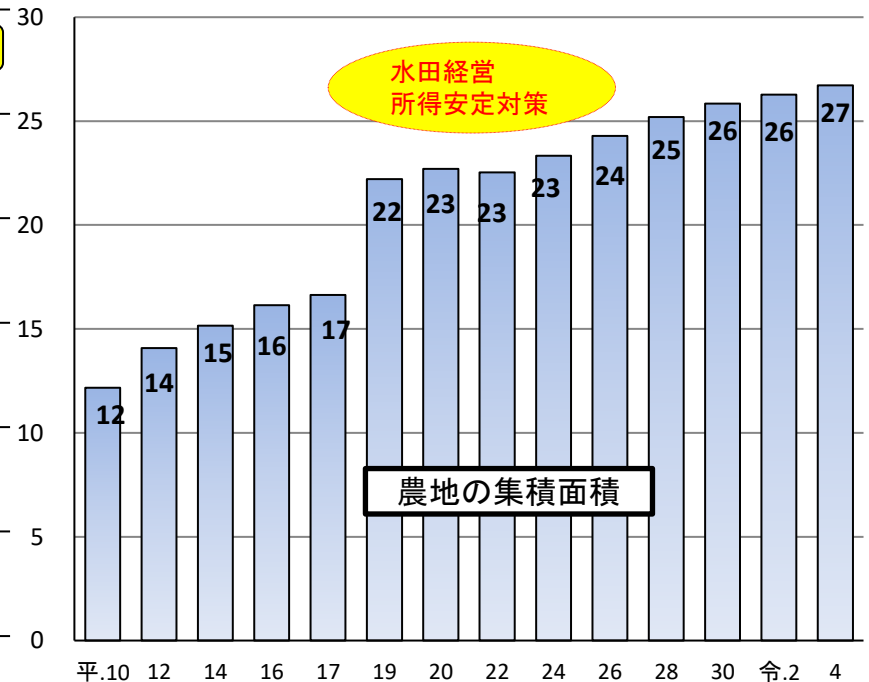
○認定農業者等が経営する農地面積は、平成19年の水田経営所得安定対策の実施等により増加し、令和4年では26万7千ha(総耕地面積の約5割)。

(万経営体) 認定農業者の推移(九州)



資料：九州農政局調べ

万 認定農業者等が経営する農地面積(九州)



資料：九州農政局調べ

認定農業者制度とは？

○農業者が自主的に作成した経営改善計画を市町村が認定し、これに基づき関係機関が協力して地域農業の担い手を育成する仕組みとして創設。既に15年以上が経過し、普及定着している制度。

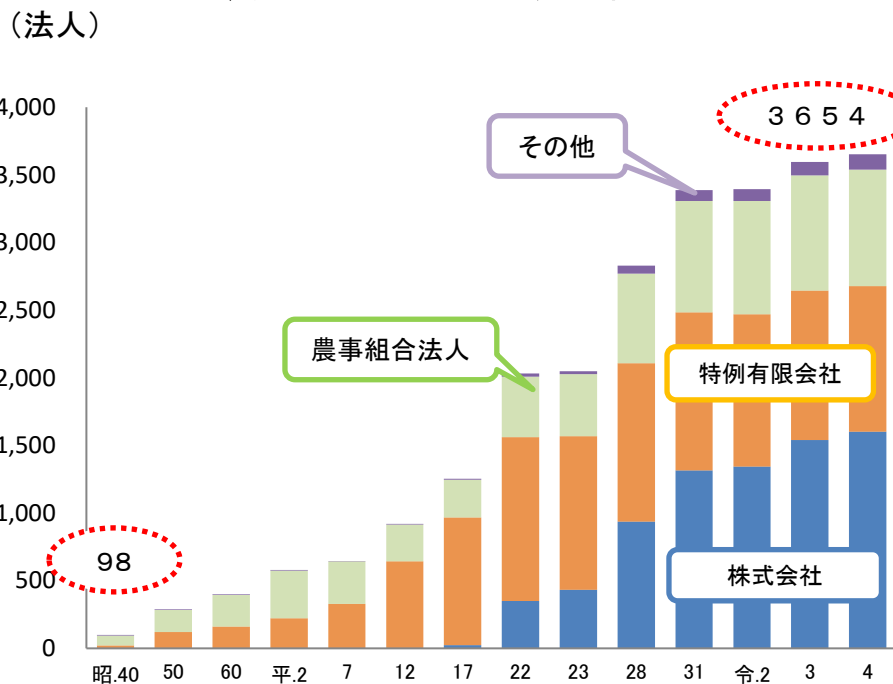
認定農業者等に含まれる農地集積の対象者とは？

○認定農業者、市町村が定めた基本構想水準到達者、特定農業団体、集落内の営農を一括管理・運営している集落営農を含む。

～農地所有適格法人と企業の農業参入の推移～

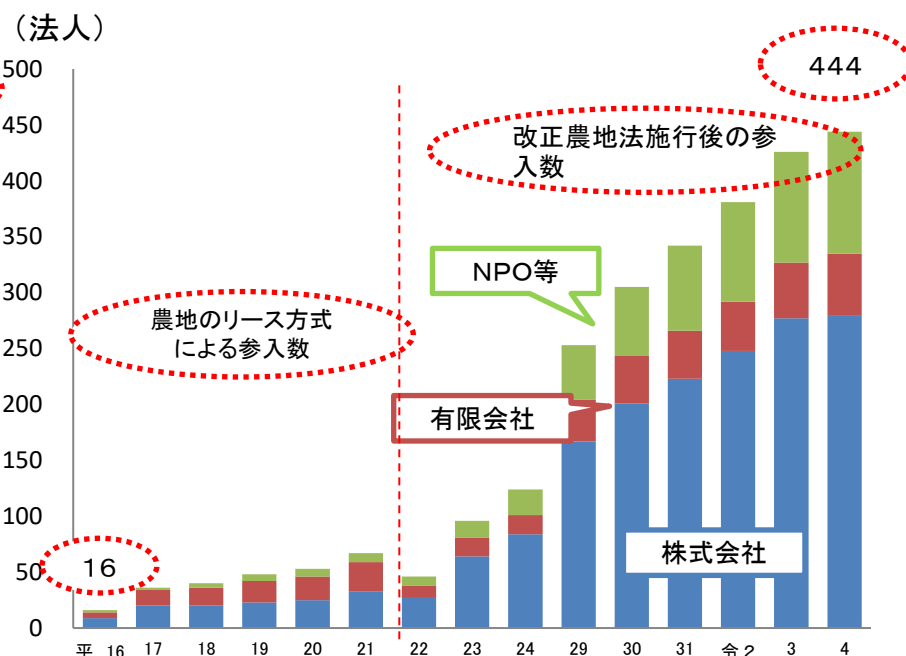
- 昭和37年の制度創設以来、農地所有適格法人は増加し、令和4年では3,654法人。
- 平成15年に特区法(リース方式)による企業の農業参入が開始され、平成17年に全国展開。平成21年の農地貸借の規制緩和等により平成24年以降増加傾向。

農地所有適格法人数の推移(九州)



資料：九州農政局調べ

企業の農業参入の推移(九州)



資料：九州農政局調べ

○農地所有適格法人とは？

農地法に規定された農地の所有権を取得できる法人をいう。
 なお、法人化することにより経営の多角化や6次産業化の推進、
 また、地域の雇用創出や地域の所得向上などに貢献。
 注：「特例有限会社」は平成17年以前は有限会社の法人数である。

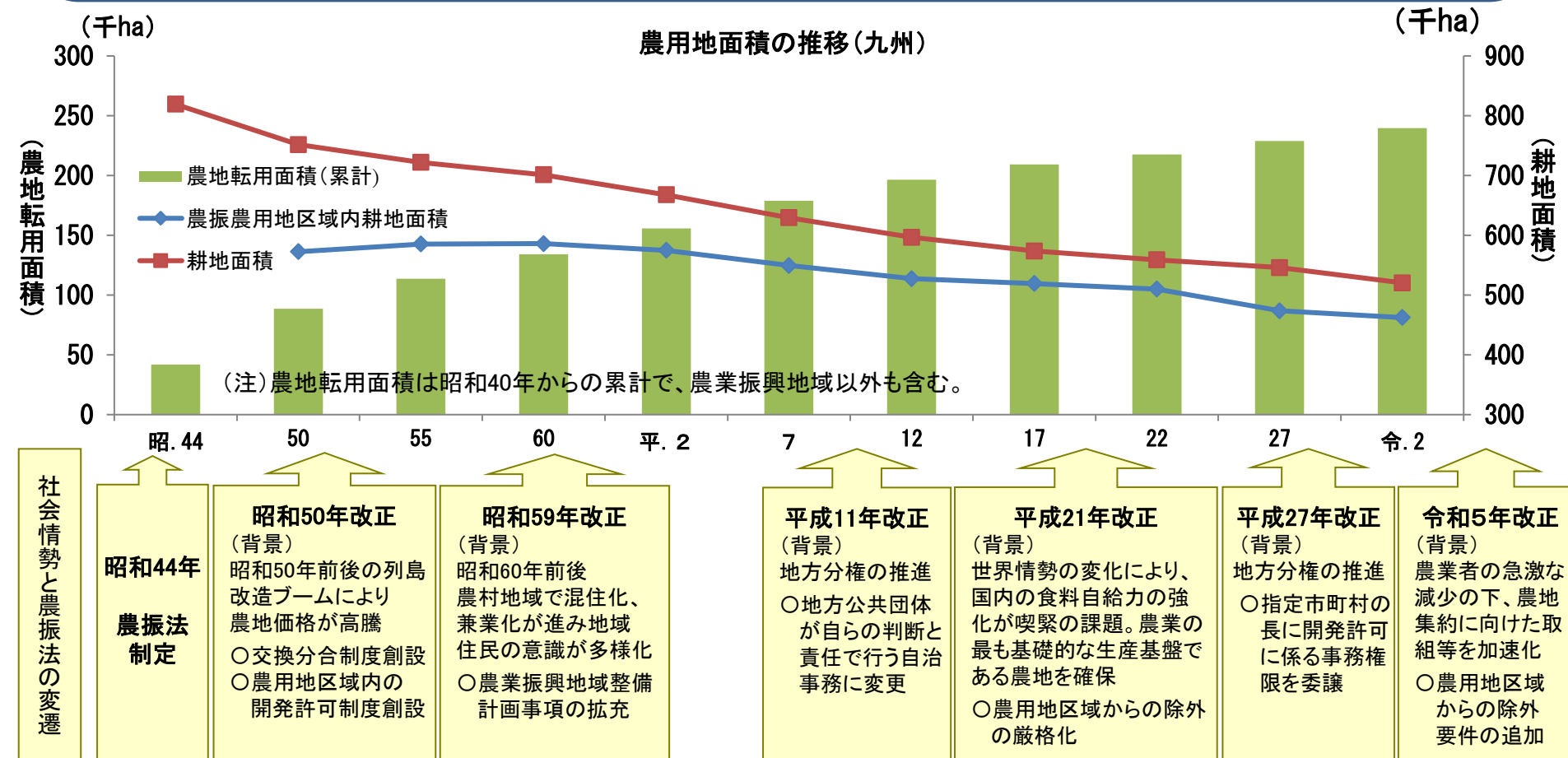
○企業の参入数とは？

調査時点の農地のリース方式による農業参入数であり、農業生産法人数の外数である。なお、24年は10月時点の概数値である。
 22年度以降は、新たな制度のもとで参入した法人数であり、21年度以前の法人はカウントしていない。

～優良農用地の面積の推移～

- 昭和44年に、国内の農業生産の基盤である農用地等の確保を図るための基本的な制度として「農業振興地域の整備に関する法律(農振法)」が制定。
- 総耕地面積の推移と比較して、農振農用地区域内耕地面積の減少率は緩やかであり、優良農用地の確保が図られている。

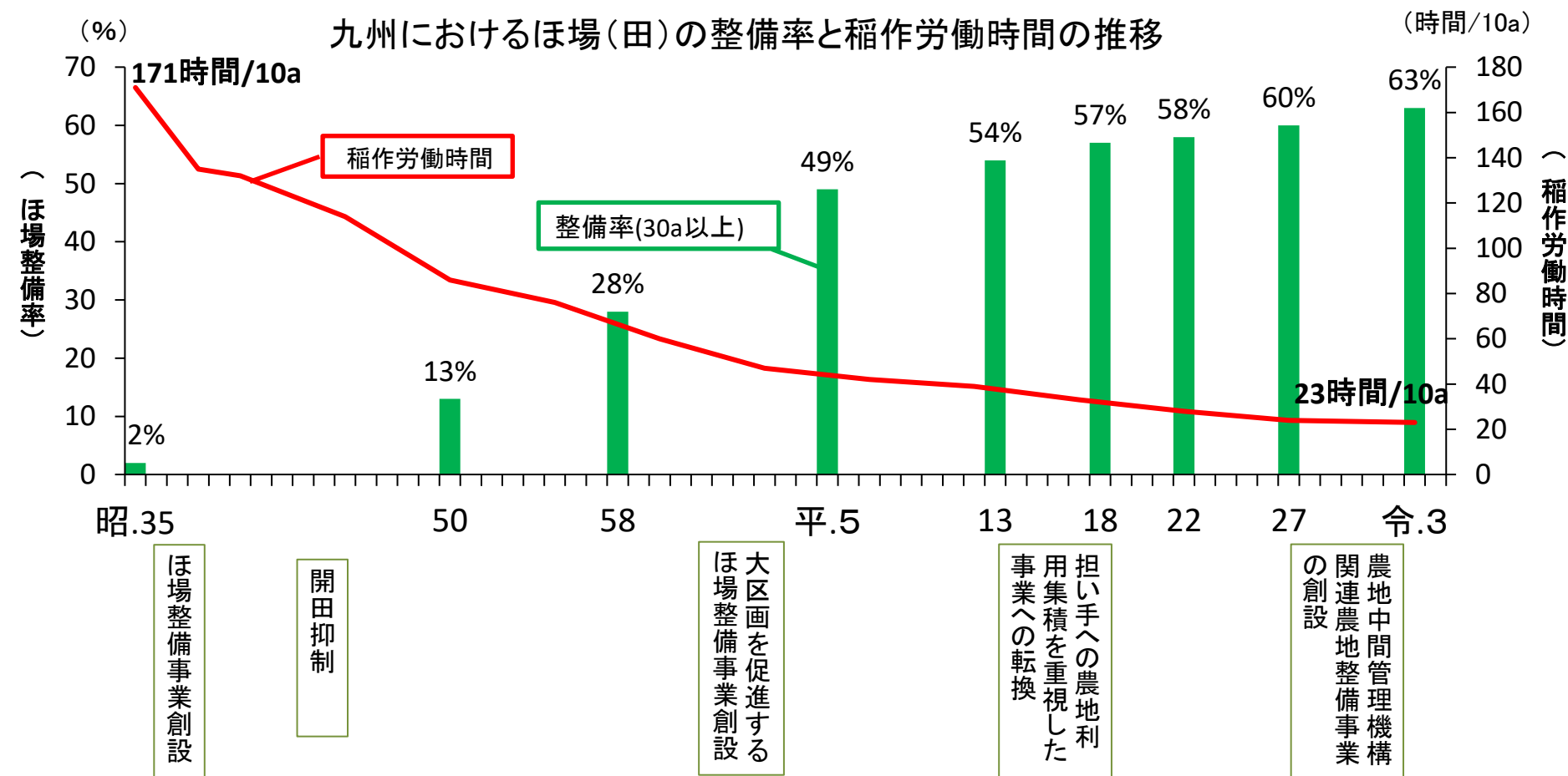
※農振農用地区域＝農業振興地域(総合的に農業振興を図るべき地域)内における集団的に存在する農用地、土地改良事業区域内の土地など生産性の高い農地等、農業上の利用を確保すべき土地として指定された区域。



資料： 耕地面積は農林水産省『耕地及び作付面積統計』、農地転用面積及び農振農用地区域内耕地面積は「九州農政局調べ」

～基盤整備の推進～

- 未整備な土地条件が規模拡大や生産コストの低減に大きな障害となっていたことから、ほ場(田)の大区画化等の基盤整備によって、生産性の向上を実現。
- 昭和35年から令和3年の約60年間で、ほ場(田)の整備率は2%から63%に向上し、稲作労働時間は機械化の進展等も伴い171時間(hr/10a)から23時間(hr/10a)までに減少。



～食生活の変化(全国)～

- 主食である米が減少する一方、畜産物、油脂等が増加。
- 昭和50年代中ごろに、米を中心に多様な副食から構成される日本型食生活が形成。
- 現在は、脂質の摂取割合が高め。
- 食品の安全性の関心が高まる中、農林水産省及び地方農政局では、消費者行政を主とする消費安全部門を平成15年に設置。

高度経済成長(栄養改善)



生活改善指導事業による食生活の巡回 昭和40年代
(キッチンカーによるデモンストレーション)

日本型食生活の形成

カップヌードル発売
食の洋風化
学校給食に米飯導入
食品輸入が世界第1位
豆乳等健康食品の関心高まる

飽食の時代

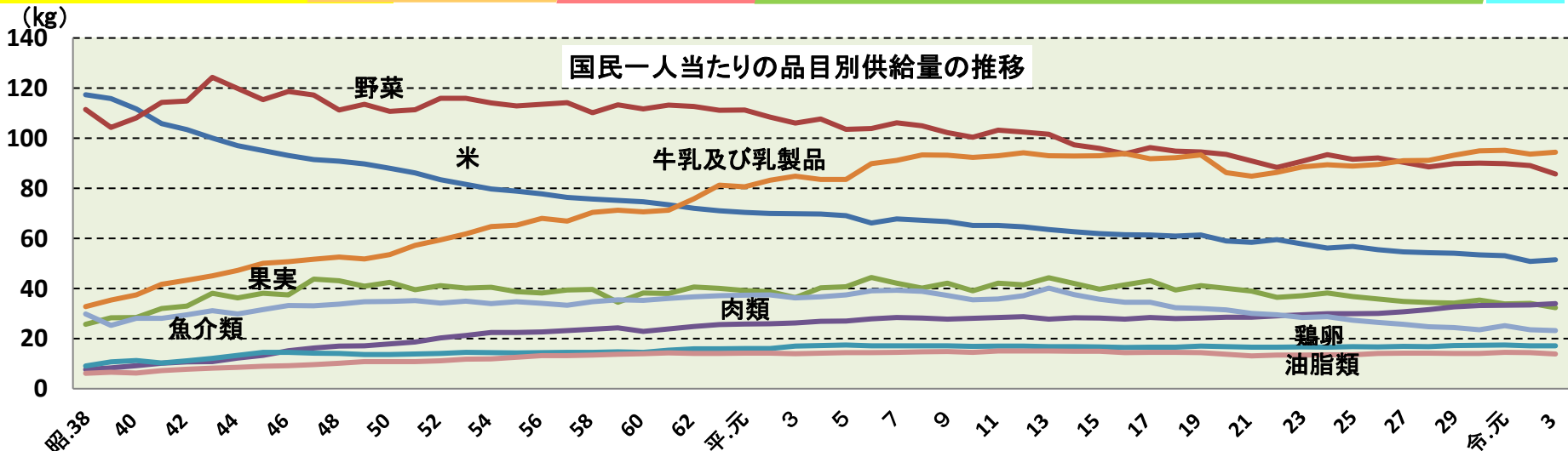
レンジ食品ブーム

安全性への関心

集団食中毒発生
O157による
食生活指針の策定
国内でBSE感染牛確認

食生活の見直し(食育)

消費・安全部設置
食育基本法制定
中国製ギョウザ食中毒事件
地産地消法制定
ユネスコ無形文化遺産登録
和食文化

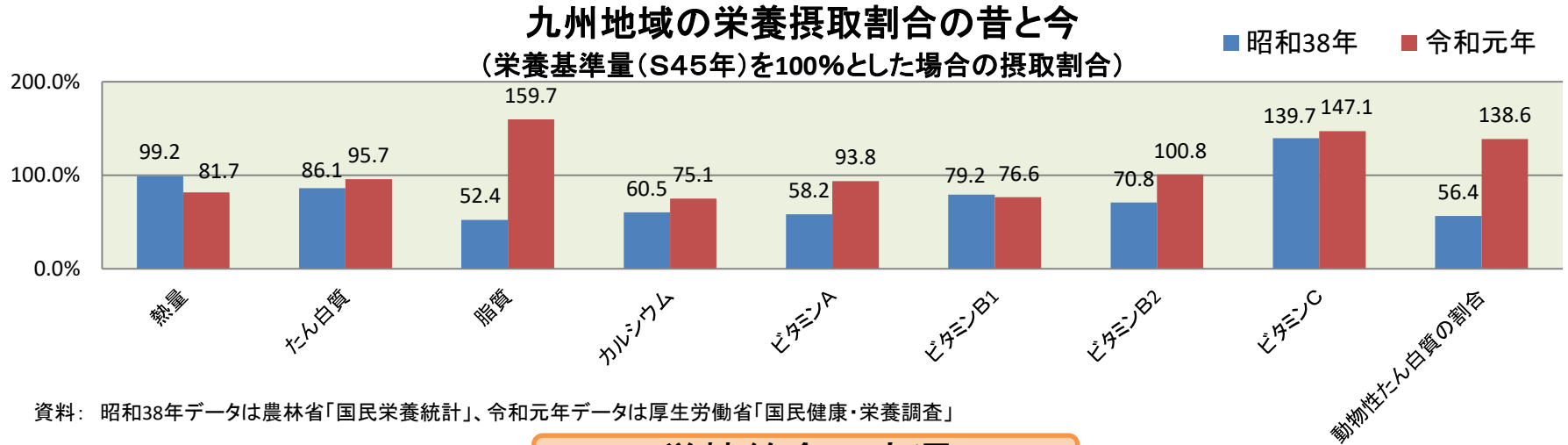


資料：農林水産省「食料需給表」

～食生活の変化(九州)～

○昭和38年当時の九州の農村部の栄養状態は、熱量は充足していたものの、栄養基準量(昭和45年に設定された目標数値)に対する動物性たん白質の摂取割合が50%程度など、質的な改善が必要であった。

○現在は、熱量が減少し、動物性たん白質割合や脂質の摂取量が大きく増加している。



学校給食の変遷

不足しがちな栄養の供給

食育の推進、米飯の導入、地場農産物の活用

昭和30年代



コッペパン 脱脂粉乳 アジフライ サラダ

昭和50年代



ロールパン 牛乳 チーズロールフライ
八宝菜 メロン

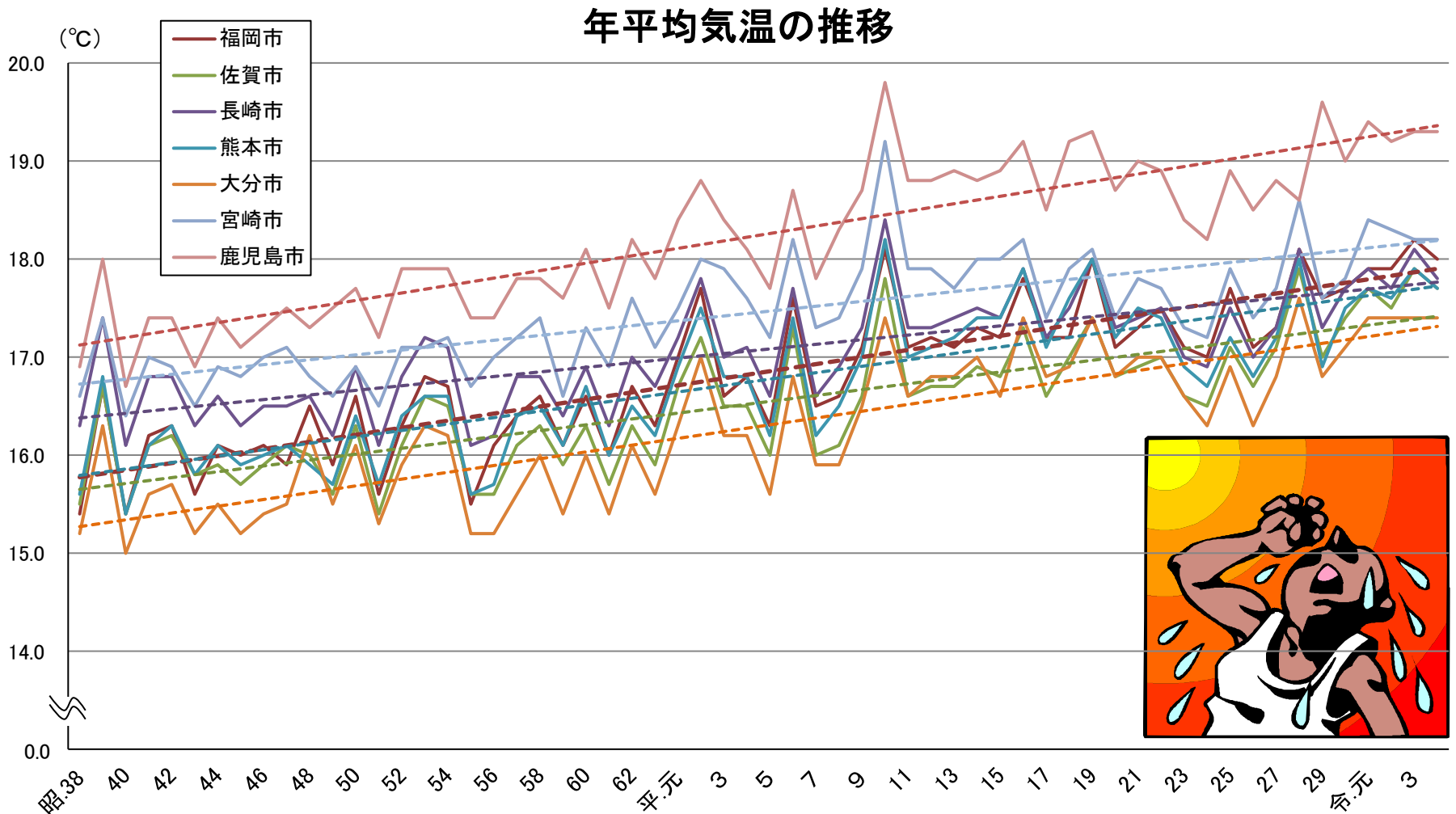
平成・令和



チャーハン 牛乳 春巻き サラダ スープ
杏仁豆腐

～気象の変化～

○九州地域の年平均気温は、各県ともに上昇傾向で、この60年間で約2℃上昇。



～九州北部・九州南部地方へ接近及び九州へ上陸した台風の推移～

○九州北部・九州南部地方への接近・上陸数をみると、接近数は年間4～5個程度、上陸数は年間0～3個程度で推移しています。ただし、長期的には、明瞭な増加、減少傾向は見られません。

(個)

